

晩成社移民団関係写真と写真師・鈴木真一

— 帯広百年記念館収蔵の歴史資料写真から —

Portrait Photographs of BANSEI-SHA Pioneers Group
And a photographer SHINICHI SUZUKI
— from the OBIHIRO Centennial City Museum Collection —

作 間 勝 彦[※]

Katuhiko SAKUMA

1. はじめに

帯広百年記念館では、十勝の歴史研究の一環として資料写真の収集、保存を行っている。この作業は、戦前から数度にわたって帯広市史の編纂に携わった郷土史家、故・棚瀬善一氏より筆者が聞き取り取材したところによれば、当初、昭和27(1952)年の帯広市開基70周年記念事業として企画された「帯広市史」の編集、発刊にともない、当時の編集委員によって着手され、その後も数回の市史改訂編纂によって追加収集された。それらの資料写真は、編纂作業の場となった帯広市図書館に保管されてきたが、昭和57(1982)年、当館の発足とともに同図書館から移管され、これが基礎資料となって今日の当館における十勝の歴史資料写真の収集、保存作業となっている。

現在、当館に保存している資料写真は総数にして約1万点を数えている。日常、新たな収集のほか、整理あるいは貸し出しなどの作業を行っているが、とくに貸し出しは新聞を中心にテレビ、各種出版物などに対してかなりの頻度となっている。

本稿は、当館におけるこうした歴史資料写真の収集、保存作業の一端として行った晩成社移民団関係写真の調査報告である。内容は、当館の収蔵写真中、撮影時期のもっとも古いこれらの写真が、いつ、どこで、どのような経緯で、また誰によって撮影されたかを関係する文献資料から明らかにするとともに、これらの写真を撮影した写真師・鈴木真一について、わが国写真史の一端とともにまとめたものである。わが国における初期の一群の職業写真家の一人としてその名を残す鈴木真一は、晩成社の中心である依田勉三の母方の叔父に当る人物である。彼によって、あるいは彼の写真館で撮影されたこれら数点の写真が、十勝開拓の先駆けとなった人々の記録にとどまらず、ともに明治という歴史の転換点において、植民地開拓と新技術摂取の文明開化という時代のメインテーマを生きた甥と叔父を結んで成立していることは、それ自体が的確な時代の証言として興味深いものと言えよう。

2. 晩成社関係写真の考察

1. 依田勉三・鈴木銃太郎両立写真(写真1)

この写真は、晩成社の副社長で、開拓団のリーダーである依田勉三と幹部(晩成社の組織上では「幹事」と言っている)である鈴木銃太郎の二人が並び立って写っているもので、勉三の日記などから明治15(1882)年5月に当時の横浜、弁天通りの「鈴木写真館」で撮影されたものであることがほぼ裏付けられる。明治15年は、よく知られているように開拓移民会社である晩成社が発足し、勉三と銃太郎が現地視察して十勝平野の中心部であるオベリベリ原野を開拓地として決め、銃太郎だけが

※帯広百年記念館 学芸研究員



写真 1

そこに残って単独越冬した年である。写真は、二人がその渡道に際して横浜を出発する直前に鈴木写真館で撮影されたものと推定できる。

勉三の日記「備忘」の明治15年4月～5月の記録から関係部分を掲載する。

4月29日－勉三、家を発し再度北海道へ向かう。

5月9日－勉三、静岡県庁に出て北海道開墾に関し願書を提出。

午後、指令及び印書を受領し、直ちに汽船三保丸に乗ず。

風浪激しく進航するを得ず。為に港中に泊す。

10日－朝、清水港を発し其の夕横浜に着し弁天通り鈴木氏に投宿す。

11日－11日より30日まで東京横浜の間に往来し札幌県官に面会す。

また本社の予算書を編み発船の機を待つ。

31日－夜、鈴木銃太郎家を辞し、依田勉三と共に汽船九重丸に乗り北海道に向かう。

夜港内に泊す。

6月1日－晴。午前7時横浜を解らんす^(註1)。

日記文中の「解らん」は、船を岩壁に繋いである艀綱を解くことで、出航の意味である。冒頭4月29日の項で「勉三、再度北海道へ向かう」とあるのは、勉三は前年の明治14(1881)年に依田家の当主である兄の佐二平らに北海道開拓の意思を明らかにし、了解されたことから、単独で最初の北海道視察を行っているためである。そして、この再度の北海道視察は、晩成社を発足させて、いよいよ北海道のどこを開拓するのかを決めるために行われた。

日記中、勉三が横浜に出て北海道へ出発するまでの宿舎となるのが弁天通りの鈴木氏であるが、これは当時、横浜にあった銃太郎の実家ではなく、勉三の母方の叔父で写真館を開いていた鈴木真一のことである。日記には、二人で写真を撮ったという記述はないが、この5月10日から横浜を出発した6月1日までの間に、二人で北海道調査への旅立ち記念に鈴木写真館で撮影したことは予想できよう。

さらに、晩成社のもう一人の幹部である渡辺勝の日記には、明治15年5月26日付に次の記録がある。

5月26日－依田勉三氏より、鈴木銃太郎君と両立の写真を賜らる。

24、5日ころ北海行の汽船に乗り込まれる由^(註2)。

ここで言っている勉三と銃太郎と両立の写真というのがこれであり、先の勉三の日記と重ね合わせると、この写真が明治15年5月の時点で撮影されたということを裏付けている。ただし、5月の何日に、また、鈴木写真館で撮影したのだという明確な記述はない。

依田勉三は、ペリーが黒船を率いてやってきた嘉永6(1853)年生まれで、この写真の時点では満29歳である。静岡県西伊豆の、当時の大沢村、現在の松崎町が生地で伊豆地方一帯にその家名を知られた資産家の次男(生まれは三男、次兄が幼くして死亡)として育った。ペリーの開国要求でわが国初の開港場となった伊豆の下田は勉三の大沢村と峠一つを越えるだけの距離にある。勉三と7歳違いで、後に依田家の当主であり、実質的に晩成社のオーナーとなる兄の佐二平は、明治初期のわが国の資本主義生成期に地方の資本家として製糸、海運、銀行業などを手がけ、同時に、当時の静岡県加茂郡および那賀郡長、静岡県議会副議長、そして明治23(1890)年には第1回帝国議会衆議院議員にも選出されるなど伊豆地方のリーダーとして活躍した人物である。また、新時代の人材育成を目指し、地域にいち早く初等、中等学校を設立して教育振興にも足跡を残している。

勉三は長じて、明治7(1874)年、21歳の時に東京へ出て、福沢諭吉の慶応義塾で学び、さらに義塾を離れてからなのか同時になのか不明だが、アイルランド人のプロテスタント宣教師ヒュー・ワッデルの英語塾にも学び、この塾で渡辺勝に出会っている。

鈴木銃太郎は安政3(1856)年に旧上田藩(現長野県上田市)藩士、鈴木親長の長男として生まれ、この写真の時点で満26歳である。明治維新によって武士階級のほとんどが没落したが、鈴木家もその中であつた。維新後の東京で、親長、銃太郎の親子ともどもにプロテスタントのキリスト教に出会って洗礼を受け、明治8(1875)年、一家で横浜に移転した。そこで、親長は横浜教会の執事になり、銃太郎は、同じく横浜でプロテスタントの宣教師、サミュエル・ロピンス・ブラウンの塾に入った。明治10(1877)年10月、当時、ブラウンやワッデルら主に横浜、東京で活動していたプロテスタント系宣教師の塾を統合して日本人の宣教師養成を目的とした東京一致神学校(現明治学院大学の前身)が東京築地に開校し、銃太郎は同校へ移った。そして、同校で同じくワッデル塾から移ってきた渡辺勝と出会っている。晩成社の三幹部は、先に記したようにワッデル塾で勉三と勝、東京一致神学校で勝と銃太郎が出会い、勝を軸につながっていった。

II. 勝・カネ婚約記念写真(写真2)

これは渡辺勝と、銃太郎の妹で勝の妻となった鈴木カネの婚約記念写真というべきもので、勝の日記から明治16(1883)年の1月5日に、やはり横浜、弁天通りの鈴木写真館で撮影されたことが裏付けられる。

勝は安政元(1854)年、旧尾張藩士の長男として生まれており、勉三より1歳年下である。この写真の時の勝は満28歳で、晩成社の十勝開拓への準備と、銃太郎の妹である鈴木カネとの結婚をまとめるためにおおわらの時期である。当時のカネは横浜の彼女の母校である共立女学校の教師兼寮生の監督をする舎監をしていた。彼女は安政6(1859)年生まれで、兄銃太郎より3歳下の当時満23歳である。明治16年のこの時期の勝の日記には次のように記録されている。

1月1日―晴。横浜鈴木真一君方に止宿し居る。

前10時東京行き汽車に乗り東京西久保葺手町ワッデル教師方に至る。

2日―晴。日本橋辺に書籍等を求む。夜ワッデル方に泊す。

3日―晴。須藤氏、石川氏と遊歩し、九段坂鈴木氏方にて写真を撮り、ワッデル方に泊す。

4日―晴。後4時汽車にてワッデル氏と共に横浜に至り二百拾二番女学校長クロスビー氏を訪う。これ余と鈴木氏と縁談の事に付きてなり。晩飯を供せらる。

夜鈴木親長君方に至り泊す。

5日―晴。前諸店に農具器械を問い合わせ。鈴木真一君方に至る。後鈴木氏と写真を撮る。

7日―晴。写真成る。前11時横浜を発し大磯宿に泊す。

10日―晴或は雨。(中略)5時大沢村依田氏に来る。同家に泊す^(註3)。

ここでは、四つの「鈴木」が登場するが、最初の「横浜鈴木真一君方に止宿し居る」の鈴木は、やはり勉三の叔父の鈴木写真館で、勝もここで、いよいよ間近にせまった晩成社の十勝開拓への準備を進めている。3日付の「九段鈴木氏方」というのは、横浜の鈴木写真館の東京支店で、横浜から東京へ出向いた折りに、そこで友人らと写真を撮ったというわけである。幕末以来、文明開化の先端であった横浜だが、明治も10年代になると文化も東京が中心となり、この時流に合わせて鈴木写真館も明治14年に東京へ支店進出した。4日付の「夜鈴木親長君方に至り泊す」の鈴木親長は銃太郎、カネ兄妹の父親。最後の5日付の「鈴木氏と写真を撮る」という鈴木氏が婚約者の鈴木カネである。

ワッデル氏というのは、新政府が明治6(1873)年にキリスト教を解禁したことにともない、翌明治7年、プロテスタントのスコットランド一致長老教会から日本へ派遣されたアイルランド人宣教師である。その後、東京の西久保葺手町(現在の港区虎ノ門4丁目界限)で、いつからかは明確でないが自分の教会を持ち、同時に英語塾を開いている。旧尾張藩士出身の勝は、明治3(1870)年に藩が開設した名古屋洋学校で英語を学んで卒業後、ワッデルが来日した年の明治7年に上京。翌明治8年、明治新政府の工部省が管轄する電信技術者養成のための学費無料、生活費支給という官費学校である電信技術学校の生徒になる。しかし一年目の終わりころに、ここの教師と衝突して退学し、生活に困ったあげく明治9(1876)年の1月、友人の紹介で世話になったのが宣教師のワッデルである。勝はこのワッデルの塾で英語教師として彼を手伝いながら聖書を学び、一年後の明治10年1月にワッデルから洗礼を受けてキリスト教徒となった。この塾で勉三と出会い、さらに、同年10月に開設された東京一致神学校で横浜のブラウン塾からやってきた銃太郎と出会ったことは先に記した。

このように、勝にとってワッデルは、恩人であるだけでなく洗礼を受けた宗教上の保護者であることから、カネとの婚約をまとめるために、カネの学校の責任者で、またカネの宗教上の保護者でもある米国人のクロスビー女史に会ってもらっているわけである。



写真2

カネと銃太郎の鈴木家が信州上田から東京に移ったのが明治5(1872)年、東京から横浜に移ったのが明治8年、そして、この横浜移転と同時に、銃太郎は外国人居留地の山手211番にあったS・R・ブラウンのブラウン塾へ、カネは、その隣の212番の共立女学校に入学している。

この共立女学校は、明治4(1871)年に、そのころに目だってきた欧米人と日本人の間に生まれ偏見の目にさらされていた混血児の救済、そして日本人女性への教育とキリスト教の伝導を目的として、米国のプロテスタント教会各派による一致婦人伝導協会から派遣されたクロスビー女史ら3人の米国人女性によって設立された。当初の校名は「アメリカン・ミッション・ホーム」である。翌明治5年、明治政府は、「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」の宣言とともに初等教育の開始を中心とする学制を發布する。これに合わせて同ホームは、英語名で「ザ・イングリッシュスピーキングスクール・フォー・ジャパニーズ・ヤングレディーズ」、日本名で「日本婦女英学校」と改名し、日本で最初の寄宿制女学校となった。そして、カネが入学した明治8年に「共立女学校」と改名したが、なお発足以来の通称「212番女学校」とも呼ばれていた。

同校の最初の卒業式は明治15年7月に行われ、その第1回卒業生3名のうちの一人がカネである。この時すでに23歳で、16歳から7年間学んだことになる。記録によると、明治10年ころの在校生は6歳から20歳まで約80名を数えている。教科は、聖書のほか音楽、英語、国語、数学、歴史、地理、天文、化学、裁縫などで、その内容は米国の教育制度に基づいた初等から高等普通科程度のものとなっている。しかも、それらの教科書の多くは英語で書かれていた。当時のわが国の女子教育に比較して、とくに音楽、英語については最高レベルにあったようである。

カネは、卒業と同時に同校の国語教師兼寄宿舎の舎監となるが、渡辺勝の妻となって北海道の開拓に身を捧げることを決意し、日記にあるように明治16年の1月4日、二人の宗教上の保護者であるワッデル氏、クロスビー女史立ち会いのもとで婚約、翌5日に鈴木真一の写真館で婚約記念とも言えるこの写真におさまったのである。

なお、勝の日記ではクロスビーを「校長」としているが、学校運営の最高責任者である「総理」が本当で、校長が別にいる。ちなみに、この共立女学校は、横浜共立学園中学校、同高等学校として、いまなおその歴史を刻んでいる。

Ⅲ. 勉三決意の姿(写真3)

この写真は、依田勉三あるいは晩成社と言えどこれだというシンボリックな一枚である。勉三がかなり粗末な装いで、しかもムシロをかぶり、欠けたお椀に向かうというみずぼらしい状況で写っている。これは、次に紹介している晩成社開拓団の横浜出港時に行われた団体撮影の際に、「勉三が十勝開拓へ不屈、不退転の決意を表すため、わざわざこのような身なりと状況を自ら演出して撮影させたものである」と大方に流布されているものである。しかし、同論の冒頭に

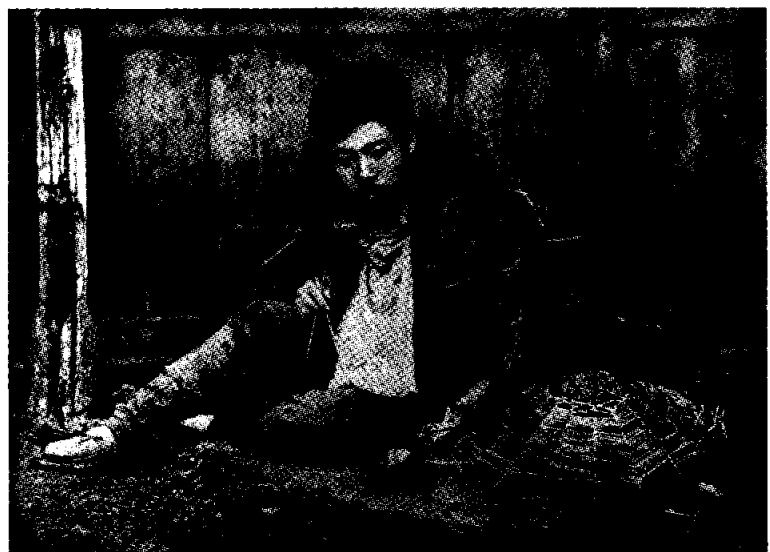


写真3

紹介した筆者の故・棚瀬善一氏からの聞き取りによると、これは開拓団の横浜集結前に、勉三が大沢村の実家で十勝開拓事業への決意を込めて撮影させたものであるという。棚瀬氏自身が現松崎町大沢の依田家を訪問して、末裔の方からそのように聞きとり、撮影した場所も教えてもらったそうである。ただし、それが大沢村出発日の明治16年3月15日当日なのか、それより前なのか、さらに撮影した写真師はだれかなどは不明である。勉三の日記や一緒に旅立った勝の日記には、3月15日に大沢村の実家を出発して松崎村の分家に寄り、17日に同分家を出発、箱根、小田原、藤沢を経て21日に横浜に到着したこと、実家や分家で別離の宴がもたれたことなどが記録されているが、こういう写真を撮影したという記述はない。写真に写し込まれている背景からは写真館のスタジオではなく戸外の実景のように見えるが、撮影者を含めなお今後の調査課題である。それにしても、その後の晩成社の十勝開拓の歩みを思うとき、勉三のこの決意の姿はけして大げさなものではなかったということになる。

IV. 晩成社開拓団1・2（写真4）

晩成社開拓団その1・その2の撮影は、明治16年の4月9日から10日にかけてやはり横浜、弁天通りの鈴木写真館で行われたものであることが勉三の日記から裏付けられる。

勉三、勝が3月15日に大沢村を離れて十勝開拓の途にのぼったことは先に記したが、最後の開拓準備の拠点となったのも横浜の鈴木写真館である。二人はここで東京の間を往来しながら役所への手続き、開拓資材の調達などに当たりながら、大沢村周辺からなんとか集めた24名の開拓移民団員の到着を待った。そこでは晩成社の組織上では「耕夫」とその家族である、この開拓移民団員の渡航と移住の手続きなどにおおわらわであった。そして、横浜港出港直前の4月9日から10日にかけてこの写真が撮影された。その経過を勉三の日記で追ってみる。

3月14日－勉三、勝は北海道に赴かんがため、大沢村に別離の宴を張り郷友を接待せり。

15日－暮れに至り、勉三、勝等、大沢寓所を出発し北海道に向かう。父兄送り来たり、松崎村に集まり会したり。

16日－松崎村にて離杯を酌む。

17日－松崎村を出でたるに、父兄は送って濱村に至り、路頭に痛く飲んで相別る。

18日－この夜は修善寺にて、19日は箱根なり、20日雨ありて午後益々急なれば小田原に宿し、21日横浜に達したり。

23日－勉三、渡航願書を携え東京農務省に出づ。

あるいは農具を求めるなどして同行者を待つ。同行者ようやく横浜に集まる。

28日－渡辺勝、横浜に耕夫を処置す。

30日－4月3日まで渡辺勝東京にて社用。耕夫吉沢竹二郎補助す。

4月7日－勉三、東京にて耕夫荷物の為に奔走す。吉沢其の事に與る。渡辺はこの日より10日まで横浜に耕夫を処置す。

9日－今明両日をもって写真師鈴木氏に乞い願ひ影を写し、1名を1号となして総員27名なり。

10日－午後、皆汽船高砂丸に乗りて6時に横浜を出でたり^(註4)。

なお、1月に鈴木カネと婚約した勝は、横浜出港を翌日にひかえたこの4月9日夜、カネの共立女学校で勉三夫妻、鈴木親長、ワッデル氏、クロスビー女史ら関係者の参列で結婚式を挙げている。上に掲げた勉三の日記には勝、カネの結婚式についての記述はないが、勝の日記には式の準備や当日の



写真4-1



写真4-2

祝宴のこと、さらに、港で旅立ちを見送る新婦カネとの一時の別れのセンチメンタルな気持ちなどが記録されている。そうした状況のなかで、この集団肖像写真は、やはり横浜の鈴木写真館で、4月9日から10日にかけて撮影されたわけである。

この写真で、晩成社最初の入植者の一人一人の姿を確認してみると、移民団-1は、前列右から渡辺勝(28歳)、依田勉三(30歳)、依田りく(21歳)。二列目右から藤江ふで(25歳)、池野あき(42歳)、高橋きよ(26歳)、山田のよ(43歳)、吉沢竹二郎(34歳)、三列目右から藤江助蔵(34歳)、山田広吉(19歳)、池野登一(42歳)、高橋利八(22歳)、高橋金造(52歳)、土屋広吉(24歳)。最後列の一人が山田勘五郎(53歳)である。

移民団-2は、前列右から山田喜平(11歳)、山田健治(4歳)、山田せい(27歳)と扶二郎(1歳)、山本金蔵(13歳)、山本新五郎(6歳)、山本とめ(46歳)。後列右から山田彦太郎(32歳)、山本初二郎(48歳)、進士ちと(42歳)である。

1, 2合わせて総員25名で、進士五郎右衛門(45歳)、進士文助(21歳)の親子2人がなにかの事情で写っていない^(註5)。



写真 5

V. 晩成社 26 名（写真 5）

ところでもう一枚、この出発に際して撮影された集団写真がある。こんどは、先の 2 枚に写っていない進士五郎右衛門と息子の文助だけに 26 号、27 号の番号を入れており、順番として先の 2 枚の後に撮影されたことがわかる。それで、こんどは全員がそろっているかという、これには吉沢竹二郎が抜けていて 26 名しか写っておらず、なかなか全員がそろわない出発直前のバタバタとしたようすがうかがえる。

また、この一人一人に入れられた番号は、写真のネガ（当時のガラスネガ）に書き入れられて焼き付けられたもので、衣服に直接書かれたり、縫い付けたりしたものではない。はたして、この番号が、便宜上のものなのか、役所などへの手続き上必要であったのかなどは不明であるが、番号の入れ方が単純に並んだ順に付けられていることから見ると、あまり意味のあるものではなさそうである。

3. 写真師・鈴木真一と日本写真史

以上、百年記念館収蔵の歴史資料写真の中から撮影時期がなおも古い晩成社関係のものについての調査結果を記述したが、この中で、旅立ちに当って大沢村の実家で撮影したという勉三の変装姿以外のものはすべて横浜の鈴木写真館で撮影されたものである。この鈴木写真館を経営する鈴木真一は、本論の冒頭で触れたように、勉三の母方の叔父に当り、わが国の写真史にその名を残している人物である。

鈴木真一は、天保 6（1835）年、やはり現在は松崎町となっている当時の加茂郡岩科村字岩地の高橋という農家に三男で生まれている。姉の文が大沢村の依田家に嫁ぎ、勉三ら兄弟の母親である。父親

は高橋文左衛門といって、家は資産家の依田家と婚姻できるくらいの家柄であったと言えよう。

勉三が生まれた年の翌、安政元(1854)年、真一は、18歳で下田の鈴木という家に婿養子に入るが、この年の11月、地震による大津波の発生で下田は壊滅状態となる。この津波は、下田が同年3月にペリーによって結ばれた日米和親条約によって函館とともにわが国最初の開港場となり、新時代への発展機運が盛り上がったところへ文字どおり水をさすものであった。しかも、その被害から立ち直りかけたころの安政5(1858)年には、下田に駐在した初代米国領事ハリスによって日米修好通商条約が結ばれ、国際貿易港の立場を横浜にさらわれてしまった。このため、津波被害からの復活をかけた一群の下田人が再び新時代に向けた飛躍を求めて横浜へ移住して行った。津波で家財のすべてを失った鈴木真一もそういう移住組の一人だった。当時、横浜の野毛、あるいは弁天通り5丁目はそういう下田からの移住者が集まったところで、通称「下田長屋」とも呼ばれていた。

横浜での鈴木真一は、当初、養蚕業に関係する蚕卵紙の仲買をしていたとされているが、その横浜で出会ったのがやはり下田の出身で、わが国における職業写真師の開祖とされる「下岡蓮杖」であった。真一は、同郷のよしみもあってかこの蓮杖から写真術を習い、明治6年、弁天通り6丁目に写真館を開業した。

ところで、写真という技術は、天保10(1839)年、フランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールによって発明された。この写真は、発明者にちなんでダゲレオタイプと呼ばれるが、通常、銀メッキした金属板に写されるものであることから、日本では銀盤写真と呼ばれている。現在のフィルムもそうであるが、光の強弱によって画像を写し出す写真の感光剤は銀の化合物によって作られるから、最初は銀の板そのものや銀メッキされた金属板に沃素や臭素の蒸気をあててフィルム兼印画紙とした。このため、1回の撮影で1枚だけ、それもレンズを通して像が天地、左右が逆に投影されるので、左右反対の写真ができあがる。しかも、初期のダゲレオタイプは、日中の自然光の中で撮影して20分くらいの露光時間が必要だった。それでも、対象の姿、形を正確に写し撮るこの写真の発明は、当時の人々に与えたその驚きの大きさとともに世界中に広がっていった。わが国に初めて写真機がもたらされたのは、発明から9年後の嘉永元(1848)年で、長崎の商人である上野俊之丞が輸入した。その後、銀盤写真がわが国に上陸したのは、ペリー艦隊やロシアのプチャーチン艦隊がやってきた下田、そして北海道の函館である。安政元年の函館では、ペリー艦隊の写真師、ブラウンによってわが国の写真史上貴重な何枚かの銀盤写真が撮影されて残されている。

写真機の長崎上陸とともに、その写真術の研究は幕末の蘭学のひとつとして行われ、幕府がオランダ軍医ポンペを教師として長崎に開いた医学伝習所や、薩摩の島津斎彬など蘭学を奨励した大名のもとでさかんに行われた。そうした中で、唯一、わが国で成功した銀盤写真の撮影として残っているのが、安政4(1857)年9月17日に撮影されたという記録のある島津斎彬の肖像写真である。しかし、わが国がこのように銀盤写真の技術解明に苦労しているところに、欧米では早くも湿板写真という技術革新が行われ、それは、長崎ほか下田に代わっての横浜、そして函館という、いわゆる外国に対して港を開いた開港場にやって来た外国人写真師によって早々と伝来した。湿板写真というのは、コロジオンという薄い被膜をつくる溶剤をガラス板に塗って、それを硝酸銀に浸し、濡れているうちにカメラにセットして撮影する仕組みである。これは、銀盤写真が露出時間に何分もかかり、1回に1枚、それも左右が反対になる写真しかできなかったのに比べると、露出時間が5秒から15秒程度となり、分から秒の単位へと大きく変わった。しかも革命的なのは、撮影した一枚のネガから左右が変わらない写真を何枚も焼き増しすることができるようになったことである。これが写真の大衆化と同時に写真師という職業が華々しく登場してくる原動力となったのである。そして、いち早くこの新技術に取り組み、文久2(1862)年には写真館を開業して、わが国における最初の職業写真師となったのが横

浜の下岡蓮杖と長崎の上野彦馬であった。

下岡蓮杖は文政6(1823)年、下田に生まれ、江戸に出て狩野派の門に学んだ絵師である。蓮杖がどういった経緯で写真と出会ったかについては色々な説があるが、絵師として写真が持つ写実性にショックを受けたことは十分想像できる。最初、下田でハリスの通訳であるヒュースケンに近付いて写真術を学ぼうとしたという逸話も残っているが、実際には横浜で米国人の写真師について技術を習得したようである。そして、絵師である蓮杖が、わが国最初の職業写真師となっていく背景として「横浜絵」あるいは「横浜写真」というものをあげることができる。横浜絵というのは蓮杖のような日本画の絵師が日本画に比べて非常に写実的に描かれる西洋絵画の影響を受けて、つまり遠近法や陰影法など西洋画の技法を取り入れて写実的に描いた日本画のことである。また横浜写真というのは、まだ江戸時代そのままの当時の日本の風物を撮影した白黒写真に彩色してカラー写真のように仕上げたものである。このわが国写真史の黎明期に写真と絵が結び合って登場した、一見して奇妙にも見える横浜絵、横浜写真というのは、ともに幕末から明治の初期にかけてエキゾチックな旅先である日本土産として当時の外国人に大変よく売れた商品であり、また輸出品でもあった。つまり、絵の技術があり、さらに写真術を覚えると新時代の事業ができるのが当時のわが国最大の国際貿易港の横浜であった。

この蓮杖に対して長崎の上野彦馬は、銀盤写真機をわが国に初めて輸入した商人、上野俊之丞の息子で、彼はポンペの医学伝習所で純粋に蘭学の一つとしてその技術を研究した。そして、蓮杖が米国人写真師の指導を得たように、彦馬の場合は、長崎の出島に滞在したフランスの写真師、ロシェから指導を受けている。

一般に、蓮杖、彦馬ともに多くの門弟を育て、わが国の写真史上、「西の彦馬に東の蓮杖」と言われているが、鈴木真一はそうした蓮杖の最初の弟子の一人となり、蓮杖や彦馬のパイオニアの努力を下地として花開いた新時代の花形職業である写真師となった。開業後の鈴木真一は、人物の肖像写真はもちろん、上記の横浜写真の製造・販売、そして独自の研究として陶磁器への写真の焼き付けに成功し、エキゾチックな日本の風物を焼き付けた陶器という、いかにも当時の外国人に好まれる土産品を開発している。ちなみに、真一の生家である伊豆の高橋家に、真一自身の肖像と履歴を焼き付けた骨壺が残っている。このほか、記録写真家としても、明治20(1887)年のわが国最初の都市水道となる横浜の水道創設事業の顛末を記録した写真帳の製作や、明治初期の横浜およびその近辺の風物を記録した写真帳製作などの記録写真の分野でも貴重な仕事を残している。歿年は大正8(1919)年である。

4. おわりに

歴史資料写真というのは、文字通り歴史の資料となる写真のことである。当館における十勝の歴史に関係する資料写真の収集量はこれまでに約1万点を数えている。収集した一枚の写真を有効な歴史資料とするためには、なんとといっても、いつころの、何が写されているのかを明らかにしなければならない。例えば風景であればどこの風景か、施設、建物であればどこのどういう施設か、人物であれば誰か、そして、それらが写された年月日、あるいはおおよその時期はいつかなどである。さらには、その写真が誰によって、どのような事情、経緯で写されたのか、それに当館への入手経路などのデータが必要であろう。それらのデータがしっかりしているものほど資料としての価値が高まる。普通一般には、古い写真ほどこうしたデータの不明なものが多く、1万点の中にはいまだに何が写っているのかさえ不明なものも少なくない。そうした中で、本稿で紹介した晩成社関係写真のように、関連する文献資料などから、いつ、どこで、しかも誰によって撮影されたのかまで解明できるのはまれである。しかし、こうしたデータの解明された数枚の写真によって晩成社の十勝開拓への旅立ちの瞬間を

構成してみると、写真（映像）の歴史資料としての有効性に改めて気付かされよう。それは、写真の「日付」についての有効性である。これについて、港千尋がその著書『写真という出来事』で次のように述べている。

「日付それ自体に、意味はない。そこに生きられた個々の生が、日付に意味を与えるのだ。写真の鍵もそこにあるに違いない」（『写真という出来事』 p 40）

資料写真の収集には、広く一般市民の協力が不可欠である。本稿がそうした理解と関心を高めてもらう一助になれば幸いである。

また、依田勉三の叔父であり、勉三や渡辺勝の日記にも度々登場し、彼等の晩成社に積極的に協力したことがうかがえる鈴木真一は、わが国の写真史に大きな足跡を残している。その彼の写真館で撮影した勉三、銃太郎、勝、カネおよび晩成社開拓団の肖像写真が、当館収蔵の資料写真中、もっとも古いものとして保存されていることは、わが国写真史の一端に関与する写真資料の保存として意義深いことである。

なお、鈴木真一の婿養子の二代目鈴木真一が明治22(1889)年、宮内庁御用達として明治天皇の母親、英照皇太后および皇后陛下を撮影したことでやはり写真史に名を残している。この二代目は群馬県出身で、本名が岡本圭三、蓮杖門下で真一の後輩に当り、真一が独立開業した明治6年に彼の長女のぶと結婚して婿養子となった。明治11(1878)年、米国に渡って最新の写真の修正技術を学び、明治14年の帰国とともに横浜の鈴木写真館の支店として東京の九段に開設した鈴木写真館をまかされた。米国留学から持ち帰ったその修正の技術で当時の一流写真師の一人となり、二代目鈴木真一を襲名したのは、皇室写真の撮影を名誉とした明治22年であり、没年は明治45(1912)年である。

最後に、写真師・鈴木真一の調査については横浜開港資料館の斎藤学芸員よりご指導をいただいた。また、同学芸員の情報から対面調査が実現した、真一の曾孫で横浜市在住の甲阪賢氏より資料提供など親身なご協力を賜った。記して御礼申し上げる。

追 記

鈴木真一に関する資料として、横浜市から東京府内へ移転した昭和4(1929)年時点の鈴木家の除籍謄本を甲阪氏より提供いただいた。これは、平成4(1992)年、横浜市中区発行のもので、これによると当時の戸主、鈴木真一は、初代真一の長男で慶応2(1866)年生まれの伊三郎となっており、「明治30年5月、前戸主真一隠居により家督を相続」と同時に「伊三郎を真一と改襲名す」と記録されている。つまり「真一」を襲名したのは前記の婿養子となった岡本圭三だけでなく、実子である長男の伊三郎も真一を襲名していることは筆者にとって新事実であった。なお、甲阪氏は、少年時代の一時を祖母である鈴木喜久（伊三郎の妻）さんと同居している。

註

- (1) 『北海道晩成社十勝開発史』(萩原實編 名著出版 1974) P 80 - 81 より引用。
- (2) 「渡邊勝・カネ日記」(『帯広市社会教育叢書』第7巻 小林正雄編註 帯広市教育委員会 1961) P 6 より引用。
- (3) 同上 P 8 より引用。
- (4) 『北海道晩成社十勝開発史』(萩原實編 名著出版 1974) P 116 - 117 より引用。
- (5) 同上掲載のグラビアより晩成社移民団の写真説明, および『帯広市史』(帯広市史編纂委員会 帯広市役所 1984) P 123 より引用。

参 考 文 献

- 前田 弘(1989)「渡邊勝とワッデル」『トカプチー十勝郷土研究』創刊号 静窓書房
- 飯沢耕太郎(1989)『写真の力』白水社
- 飯沢耕太郎(1991)『写真の森のピクニック』朝日新聞社
- 『横浜共立学園120年の歩み』編集委員会(1991)『横浜共立学園120年の歩み』学校法人横浜共立学園
- 『横浜共立学園の120年』編集委員会(1991)『横浜共立学園の120年』学校法人横浜共立学園
- 飯沢耕太郎(1993)『写真の現在』未来社
- 横浜開港資料館編(1995)『よこはま人物伝』神奈川新聞社
- 柏崎良一(1995)「オベリベリ開拓に尽くした信州上田藩一士族父子のルーツを探る」『帯広百年記念館紀要』第13号 帯広百年記念館
- 飯沢耕太郎(1996)『写真美術館へようこそ』講談社現代新書 講談社
- 小沢健志(1997)『幕末・明治の写真』ちくま学芸文庫 筑摩書房
- 木下直之ほか(1997)「上野彦馬と幕末の写真家たち」『日本の写真家』1 岩波書店
- ジャン・ボードリヤール(1997)『消滅の技法』パルコ出版
- 港 千尋(1998)『写真という出来事』河出書房新社
- 木下直之ほか(1999)「田本研造と明治の写真家たち」『日本の写真家』2 岩波書店
- 木下直之ほか(1999)「日本写真史概説」『日本の写真家』別巻 岩波書店